

学位論文要約

遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達：
交代制ルールの産出とその主導者を中心に

広島大学大学院教育学研究科

学習開発専攻

藤田 文

目 次

第 1 章 問題と目的

第 2 章 幼児から小学生までを対象とした二者関係における関係調整の発達

ー自由遊び場面における交代制ルール of 産出ー (研究 1)

第 3 章 交代制ルールに及ぼす遊具の資源量の影響からみた関係調整の発達

ーボーリングゲーム場面における幼児の交代制ルール of 産出ー (研究 2)

第 4 章 交代制ルール of 産出と主導者の観点からみた関係調整の発達

第 1 節 魚釣りゲーム場面における幼児の二者関係の関係調整 (研究 3)

第 2 節 魚釣りゲーム場面における幼児の三者関係の関係調整 (研究 4)

第 5 章 交代制ルール of 安定性からみた幼児の関係調整の発達

第 1 節 魚釣りゲーム場面における交代制ルールに及ぼす

ゲームの難易度 of 影響 (研究 5)

第 2 節 お絵かき遊び場面における交代制ルールに及ぼす

交代のタイミング of 不明確さ of 影響 (研究 6)

第 6 章 総括

第 1 節 本研究で得られた知見ー各研究結果のまとめー

第 2 節 交代制ルール of 産出と主導者の観点からみた

関係調整の発達と性差

第 3 節 教育への示唆

第 4 節 今後の課題

引用文献

第1章 問題と目的

遊びの中で仲間との関係調整を行う能力は、社会性の発達の1つの指標とみなされている (McLoyd, Thomas, & Warren, 1984)。また、現代社会では青年期のいじめ等の問題から、仲間関係における社会的能力への関心が高まっている。幼児期に仲間との関係調整の能力が欠如すると、青年期の社会的不適応のリスクとなることも示されている (前田, 2001)。このリスクを軽減するためには、幼児期からの関係調整の発達の様相を明らかにする必要がある。

関係調整とは、「円滑な社会的相互作用を行うために、集団内の対人関係およびコミュニケーションに働きかける能力」と定義され、「関係重視」「関係維持」「葛藤への対処」の三要素で構成されているとされている (藤本・大坊, 2007)。本研究では、この定義に基づき仲間との関係調整の発達を検討する。

従来、仲間との関係調整はいざこざ場面を中心に研究されてきた。いざこざの解決方略は、3歳児までは「実力行使」「拒絶・拒否」等攻撃的で自分の意志を押し通す方略が多いが、4, 5歳児になると「依頼」「理由を聞く」等言語的に相手と交渉する方略に発達することが示されている (浅賀・三浦, 2007)。

しかし、これらの研究は、関係調整が悪化したいざこざ場面の「葛藤への対処」のみに注目しており、奪われた遊具を奪い返すための一時的な関係調整しか取り扱っていなかった。つまり先行研究には、遊びの中に他者を取り込んで遊びを共有する「関係重視」や、遊具と同時に他者の行動にも注意を向けて他者と継続的に遊びを展開するための「関係維持」の要素が不足している。

そこで本研究では、「関係重視」や「関係維持」の要素を含む幼児の仲間との関係調整の発達を検討する。そのために、母子の関係調整の研究からその視点を考えていく。母子関係の研究では、母親が、母親と遊具の両方に子どもの注意を向けさせるため、繰り返しのやり取りのルールを産出することが示されている (Bakeman & Adamson, 1984; 吉田, 2010)。つまり、規則的な行動のルールを産出する母親が足場かけとなり、子どもは共同注意の能力を獲得していく。しかし、仲間との関係調整では足場かけをしてくれる母親はいない。また、仲間の反応は不規則で予測不可能なものが多い。このような仲間との関係調整において足場かけとなるのは、規則的な行動のルールではないかと考えられる。

従って本研究では、ルールの産出が仲間との関係調整の足場かけになると仮定して、関

係調整の発達を検討していく。社会的遊びが平行遊びから協同遊びへ発達することから考えると、産出されるルールは、遊具を平行的に使用する同時制ルールから遊具の共有度が高い交代制ルールへと発達すると予想される。

確かに同時制ルールでも関係調整はできるが、自分が遊びを実行する間に他者の行動に注意を向けられない。一方交代制ルールでは、順番を待つ間他者の行動に注意を向けることが可能になる。他者の行動をよく見ることで、他者を遊びに取り込み、他者との関係調整がより発展していくと考えられる。従って本研究では、同時制ルールから交代制ルールへの発達を確認した後、より関係調整の足場かけとなりうる交代制ルールの産出を中心に分析を行っていく。

また、仲間との関係調整をうまく行うためには、ルールを産出することに加えて、他者を配慮した上でそのルールを主導的に実行することが必要だと考えられる。従って、本研究では、ルールの主導者にも注目して検討を行う。

以上のことから本研究の目的は、遊び場面を設定し、幼児の仲間との関係調整の発達を、交代制ルールの産出とその主導者の観点から検討することである。加えて、「もの」(遊具)と「人」(他者)の要素を変化させる場面を設定し、ルール産出の難易度を変化させて、幼児の関係調整に関わる要因を明らかにする。

一連の研究で明らかにしていく点は、それぞれ以下の通りである。

(1)研究1では、4歳児から小学3年生までを対象として、比較的自由度の高い遊具での遊び場面を設定して、子ども同士の二者関係において、どの程度交代制ルールを産出できるのかその発達を明らかにする。また、ルールを他者に言語的に提案する子どもをルールの主導者として、ルールの主導がどの程度出現するのかについても検討する。

(2)研究2では、研究1によって見いだされたルールの産出と主導者の発達が顕著にみられる年齢を対象として、さらに限定したゲーム場面を設定して、二者関係におけるルールの産出の発達を検討する。遊具を限定してある程度基本的なルールが決定されていれば、交代制ルールを産出し他者との関係調整がうまくいく可能性もあると考えられるからである。特に、「もの」の要素として遊具の資源量を変化させて、遊具の資源量がルールの産出に及ぼす影響について分析する。さらにルールの産出といざこざの発生との関連を調べ、交代制ルールが関係調整に重要なのかどうかについても考察する。

(3)研究3では、より明確な交代の意志がなければ交代できないようなゲーム場面を設定

して、二者関係における交代制ルールへの産出と主導者の発達についてさらに検討する。特に交代制ルールの規準の設定の発達について検討する。また、交代のタイミングを計って交代のきっかけを作る子どもをルールの主導者として、より他者を取り込んだ他者への配慮の大きいルールの主導が、加齢に伴って増加するのかを検討する。

(4) 研究4では、研究3で示された交代制ルールへの産出や主導者による関係調整についてさらに条件を変えて検討する。「ひと」の要素として仲間の人数を変化させて、三者関係における交代制ルールへの産出と主導者の発達を検討する。三者関係になると、待機者が二人になるために、次の順番の子どもを決定して交代制ルールを産出することが困難になると考えられる。このようなより全体的な他者への配慮が必要になる場面での関係調整の発達について検討する。

(5) 研究5では、研究3で示された交代制ルールへの産出や主導者による関係調整はどの程度安定したものかについて検討する。「もの」の要素としてゲームの難易度を変化させて、ゲームの難易度が、二者関係における交代制ルールへの産出と主導者に及ぼす影響について分析する。

(6) 研究6では、「もの」の要素として遊具の質を変化させて、二者関係における交代制ルールへの産出と主導者に及ぼす遊具の質の影響を検討する。ここでいう遊具の質とは、交代のための規準が明確に設定しやすいかどうかという点である。規準が不明確な遊具の場合にどのように交代の規準を設定するのか、またルールの主導者がどのように他者を配慮するのかについて分析する。

第2章 幼児から小学生までを対象とした二者関係における関係調整の発達

－自由遊び場面における交代制ルールへの産出－(研究1)

目的: 4歳児から小学3年生までを対象に、どの程度交代制ルールを産出できるのか、また、ルールを主導する提案がどの程度出現するのかを検討する。

方法: (1) **対象者:** 4歳児16名、5歳児10名、小学1年生20名、2年生10名、3年生10名の計66名。(2) **遊具:** 積み木8個、ビー玉30個、おはじき30個、木製かなづち1本。(3) **手続き:** 対象者を同性・同年齢の二人組にして遊具を提示し自由に遊んでもらった。15分間の遊びの様子をビデオ録画した。

結果と考察: (1) ルールの産出: 幼児では自由度の高い遊具の場合、二人で一緒に遊ぶ

明確なルールの産出が非常に少なかった。

(2) ルールの主導者：遊び開始時の行動パターンを分類し、ルールを提案して主導的に関係調整をするかを分析した (Fig. 1)。幼児では平行的な遊び「単独-単独」が多いが、4歳児から5歳児にかけて「提案-参加」が急増することが示された。

以上の結果から、ルールは未熟だが提案が急増し、関係調整が発達する時期である

4歳児から5歳児にかけて焦点を当てる必要があることが示された。

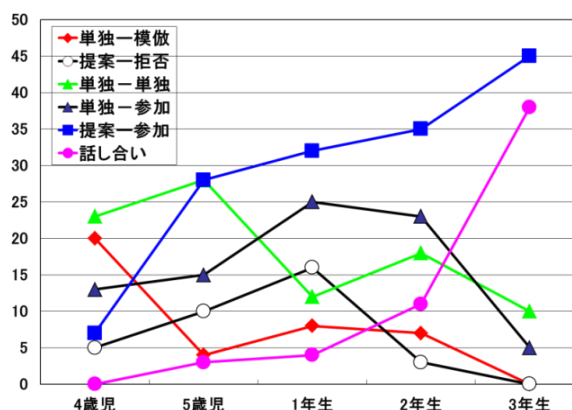


Fig. 1 他者との関係調整のパターンの出現率

第3章 交代制ルールに及ぼす遊具の資源量の影響からみた関係調整の発達

ーボーリングゲーム場面における幼児の交代制ルールの産出ー(研究2)

目的：研究2では、ボーリング場面を設定して、遊具が限定されれば幼児がルールを産出できるかを検討する。また、遊具の量を二人に1個の場面と2個の場面を設定し、産出ルールとの関連を検討することを目的とする。

方法：(1)対象者：4歳児28名、5歳児28名の計56名。(2)遊具：ボーリングゲームのピン10本とボール2個。(3)手続き：対象者を同性・同年齢の二人組にして、ボーリングゲームで7分間遊んでもらいビデオ録画した。二人にボールが1個の少資源条件とボールが2個の多資源条件に、対象者を分けた。

結果と考察：二人の交互の投球が2回以上継続されれば、交代制ルールの産出ありとしてペアを分類した (Table 1)。対数-線形モデルによる分析を行った結果有意な傾向が見られ ($u=.448, SE=.27, p<.10$)、5歳児は条件に関わらず交代制ルールを産出し、4歳児は少資源条件では交代制ルール、多資源条件では同時制ルールを産出する傾向が示された。

Table 1 投球順序に関する産出ルール(ペア数)

	4歳児		5歳児	
	少資源	多資源	少資源	多資源
交代制ルール	6	1	6	6
同時制ルール	1	6	1	1

この結果から遊具を限定すれば幼児でもルールを産出でき、多資源条件で4歳から5歳にかけて同時制ルールから交代制ルールへ発達することが示された。

第4章 交代制ルール of 産出と主導者の観点からみた関係調整の発達

第1節 魚釣りゲーム場面における幼児の二者関係の関係調整(研究3)

目的：投げられたボールを取って交代するボーリングでは交代の主導者を分析できなかった。そこで研究3では、明確な交代の意志を伴って交代する、つまり遊具が実行の際に手から放れない魚釣りゲーム場面を設定し、交代制ルールの産出とその主導者を中心に4歳児と5歳児の年齢差と性差を検討する。

方法：(1)対象者：4歳児54名、5歳児50名の計104名。(2)遊具：市販の魚釣りゲーム。魚は8匹。釣り竿は二人に1本。(3)手続き：対象者を同性・同年齢の二人組にして、魚釣りゲームで10分間遊んでもらい、ビデオ録画した。

結果と考察：(1)交代制ルールの産出：すべての交代行動を、魚が何匹釣れたら交代するか、釣れていなくても交代するかでその規準を分類した。各交代規準の出現割合について、交代規準ごとに年齢×性別の分散分析を行った(Table 2)。その結果、1匹交代で年齢の主効果($F(1,45)=6.61, p<.05$)と年齢と性別の交互作用が有意で($F(1,45)=4.06, p<.05$)、

1匹交代は4歳児よりも5歳児で多く、特に5歳女児で多いことが

規準	4歳児		5歳児	
	男児	女児	男児	女児
一匹交代	26.1(26.2)	28.9(34.8)	33.8(30.3)	65.2(26.6)
全部交代	19.3(34.9)	17.6(33.5)	10.0(31.6)	2.4(8.9)
数匹交代	18.2(31.8)	5.4(7.8)	21.6(34.4)	11.0(15.9)
規準なし	28.2(24.3)	23.9(27.7)	26.2(17.8)	11.8(14.5)

注1:数値は各タイプの1ペアあたりの平均出現割合。注2:()内は標準偏差。

示された。

(2)交代制ルールの主導者：竿を持って魚を釣っている方を実行者、順番を待っている方を待機者とした。実行者から竿を渡す場合を実行者主導調整、待機者が竿を取り上げる場合を待機者主導調整とした。各出現割合について、主導者ごとに年齢×性別の分散分析を行った(Table 3)。その結果、全体的に

は待機者主導調整が多いが、実行者主導調整で、年齢と

主導者	4歳児		5歳児	
	男児	女児	男児	女児
実行者主導	28.9(27.8)	21.7(20.8)	16.3(20.9)	34.9(24.3)
待機者主導	54.8(35.8)	55.1(40.3)	69.3(28.6)	52.0(24.4)

注1:数値は各タイプの1ペアあたりの平均出現割合。注2:()内は標準偏差。

性別の交互作用に有意な傾向が見られ($F(1,45)=2.98, p<.10$)、実行者主導調整は5歳女児で多い傾向が示された。

(3) 交代制ルール of 規準といざごごの出現との関連：1 匹交代と規準なしについて，出現割合が高い半数のペアを高群，低い半数のペアを低群として，いざごごの出現の違いを検討した (Table 4)。いざごご出現数について，規準ごとに年齢×性別×規準群の分散分析を行った。その結

果，規準なしで

Table 4 二人組の魚釣り場面の年齢別・性別・規準群別の平均いざごご回数

		4 歳児		5 歳児	
		男児	女児	男児	女児
規準群の主効果	1 匹交代高群	2.0(1.1)	2.0(0.5)	1.9(0.8)	2.0(1.1)
が有意で ($F(1,41)=6.31$, $p<.05$), 規準なし	1 匹交代低群	3.1(1.3)	2.2(0.8)	2.8(0.8)	1.5(0.9)
	規準なし高群	3.3(1.4)	2.3(5.1)	2.3(1.7)	2.3(5.3)
	規準なし低群	1.8(0.9)	1.9(2.1)	2.4(6.6)	1.2(2.2)

注：() 内は標準偏差。

しが多いペアはいざごごが多いことが明らかになった。

以上の結果から，規準が明確な 1 匹交代は 5 歳児で多く，規準なしの交代が多いペアでいざごごが多いことから，関係調整には規準が明確な交代制ルールの産出が重要であることが示された。また，5 歳女児で 1 匹交代と実行者主導調整が多く，規準が明確で他者配慮のある関係調整は，女児の方が早く発達することが示唆された。

第 2 節 魚釣りゲーム場面における幼児の三者関係の関係調整(研究 4)

目的：研究 4 では，三人組の魚釣りゲーム場面を設定し，二人組と同様に 4 歳児と 5 歳児の関係調整の年齢差と性差を検討することを目的とする。

方法：(1) **対象者**：4 歳児 99 名，5 歳児 99 名の計 198 名。(2) **遊具**：研究 3 と同様の市販の魚釣りゲーム。(3) **手続き**：対象者を同性・同年齢の三人組にして，魚釣りゲームで 10 分間遊んでもらい，ビデオ録画した。

結果と考察：(1) 交代制ルールの産出：すべての交代行動について研究 3 と同様に分析した (Table 5)。その結果，1 匹交代で年齢 ($F(1,59)=4.73$, $p<.05$) と性別 ($F(1,59)=4.26$, $p<.05$) の主効果が有意で，1 匹交代は 4 歳児よりも 5 歳児で多く，男児よりも女児が多い

Table 5 三人組の魚釣り場面の年齢別・性別の交代規準

規準	4 歳児		5 歳児	
	男児	女児	男児	女児
1 匹交代	33.7(32.9)	39.0(34.0)	39.9(35.9)	72.4(27.9)
全部交代	32.6(44.8)	14.8(35.1)	28.6(46.9)	6.3 (25.0)
数匹交代	10.8(18.6)	22.0(31.7)	6.5(17.1)	4.1(9.3)
規準なし	19.9(23.9)	19.6(20.2)	18.5(21.7)	11.1(13.6)

注：() 内は標準偏差。

ことが示された。また、数匹交代で年齢 ($F(1,59)=5.58, p<.05$) の主効果が有意で、数匹交代は5歳児よりも4歳児で多いことが示された。さらに、全部交代 ($F(1,59)=4.24, p<.05$) で性別の主効果が有意で、全部交代は女兒よりも男児で多いことが示された。

(2) 交代制ルールの主導者：研究3と同様に分析を行った結果、実行者主導調整で年齢と性別の交互作用に有意な傾向がみられ ($F(1,59)=3.75, p<.10$)、二人組の場合と同様に実行者主導調整は5歳女兒で多い傾向が示された。

(3) 交代制ルールの規準といざご出現との関連：研究3と同様に分析を行った結果、規準なしでは規準群の主効果が有意で ($F(1,58)=4.77, p<.05$)、規準なしが多いペアは、少ないペアよりもいざごが多いことが明らかになった。

(4) 順番確認と交代の仲介：順番確認発言と仲介（待機者の一人が他の待機者に竿を渡す）について年齢×性別の分散分析を行った結果、両方とも性別の主効果が有意で（順番確認 $F(1,62)=12.75, p<.01$ ；仲介 $F(1,62)=11.38, p<.01$ ）、女兒の方が男児よりも順番確認発言と仲介が有意に多いことが示された。

以上の結果から、二人組よりも年齢差と性差の有意差が多く見られ、三人組の関係調整でも規準が明確な交代制ルールが重要であることと、他者配慮のある関係調整は、女兒の方が早く発達することがより明確に示された。

第5章 交代制ルールの安定性からみた幼児の関係調整の発達

第1節 魚釣りゲーム場面における交代制ルールに及ぼすゲームの難易度の影響(研究5)

目的：交代制ルールの安定性を検討するため、研究5ではゲームの難易度が交代制ルールの産出と主導者に及ぼす影響を検討することを目的とする。

方法：**(1)対象者**：4歳児34名、5歳児38名の計72名。**(2)遊具**：市販の魚釣りゲーム。平易なゲームは、釣り糸が棒で揺れないため釣りやすく、困難なゲームは、釣り糸がひもで揺れるため釣りにくい。**(3)手続き**：対象者を同性・同年齢の二人組にして、10分間魚釣りゲームで遊んでもらい、ビデオ録画した。

結果と考察：すべての交代表行動と交代の主導者といざごの出現数について研究3と同様に分析した。その結果、規準なしで条件の主効果が有意で ($F(1,32)=5.77, p<.05$)、平易条件よりも困難条件の方で有意に多かった。また、実行者主導調整で、条件の主効果に有意な傾向が見られ ($F(1,45)=2.96, p<.10$)、困難条件よりも平易条件の方で多い傾向にある

ことが示された。いざこざの出現数については、条件の主効果が有意で ($F(1,31)=4.40$, $p<.05$)、困難条件よりも平易条件の方で、いざこざが少ないことが明らかになった。

以上の結果から、4歳児も5歳児もゲームの難易度に影響され、困難条件に比べて平易条件では、規準が明確な一匹交代のルールを産出し、実行者主導調整も多く、いざこざの出現数が少なく関係調整しやすいことが明らかになった。

第2節 お絵かき遊び場面における交代制ルールに及ぼす

交代のタイミングの不明確さの影響(研究6)

目的：研究6では、交代の規準が外的に判断しにくいお絵かき遊び場を設定し、交代制ルールの産出と主導者へ及ぼす影響を明らかにする。

方法：(1) **対象者**：4歳児44名、5歳児36名の計80名。(2) **遊具**：市販の「スイスイお絵かき」を採用した。(3) **手続き**：対象者を同性・同年齢の二人組にして、10分間お絵かき遊びで遊んでもらい、ビデオ録画した。

結果と考察：(1) **交代制ルールの主導者**：お絵かき遊びでは、交代の規準が外的に不明確なため、交代の主導者の観点から関係調整の分類を行った。各タイプの出現割合について、タイプ別に年齢×性別の分散分析を行った (Table 6)。実行者の描画中にペンを取り上げる他者配慮なし型待機者主導調整は年齢の主効果が有意で ($F(1,33)=5.47$, $p<.05$)、5歳児よりも4歳児の方が多かった。

Table 6 お絵かき遊び場面の年齢別・性別の交代の主導者

	4歳児		5歳児	
	男児	女児	男児	女児
実行者主導調整	63.6(19.9)	46.4(23.4)	56.5(28.2)	43.9(21.2)
言語的要求型 待機者主導調整	6.6(7.1)	3.4(5.8)	3.9(3.9)	18.2(32.8)
他者モニター型 待機者主導調整	9.4(11.7)	27.9(25.2)	27.9(31.7)	30.1(17.6)
他者配慮なし型 待機者主導調整	19.5(17.4)	20.9(15.8)	10.7(9.9)	5.7(6.3)

注1:数値は各ルールの1ペアあたりの平均出現割合 注2:()内は標準偏差。

(2) **関係調整といざこざの関連**：研究3と同様に分析した結果、他者配慮なし型待機者主導調整において主効果に有意差が見られ ($F(1,29)=8.79$, $p<.01$)、他者配慮のない関係調整が多いといざこざが多く出現することが示された。

以上の結果から、お絵かき場面では、4歳児では他者配慮のない待機者主導調整がみられ、

その場合いざこざが多かった。外的規準が不明確な場面では、より他者の行動を見ること
が関係調整にとって重要であることが示唆される。

第6章 総括

第1節 本研究で得られた知見—各研究結果のまとめ—

本研究の目的は、遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達を、ルールの産出と
その主導者の観点から検討することであった。加えて、「もの」(遊具)の要素を変化させる
場合と、「人」(他者)の要素を変化させる場合を設定し、ルール産出の難易度を変化させて、
子どもの関係調整に関わる要因を検討することであった。まず、研究1から6までで得ら
れた結果を以下にまとめる。

研究1では、4歳児から小学3年生までを対象に、比較的自由度の高い遊具での遊び場面
を設定して、二者関係における交代制ルールの産出とその主導者の発達を検討した。その
結果、1年生から3年生にかけて同時制ルールから交代制ルールへと産出ルールが発達し、
相互に提案をして主導的に関係調整するようになることが示された。加齢に伴い、他者
を取り込んで他者の行動に注目しやすく、自己と他者の両方に注目できる関係調整を行うよ
うになることが示唆された。幼児ではルールを産出することが困難だったが、4歳児から5
歳児にかけて提案が急増し、他者への視点が増加して関係調整の能力が発達する時期であ
ることが明らかになった。

研究2では、4歳児と5歳児を対象に、基本的なルールが決定されており遊具を限定した
ボーリングゲーム場面を設定して、二者関係におけるルールの産出の発達を検討した。そ
の結果、遊具を限定すれば、小学生と同様に幼児もルールを産出することができることが
示された。4歳児は遊具の資源量に影響され、遊具が多いと同時制ルールを産出したが、5
歳児は資源量に影響されず安定して交代制ルールを産出した。いずれもいざこざは少なく、
4歳児から5歳児にかけて同時制ルールから交代制ルールに発達し、ルールがあることが仲
間との関係調整に重要であることが示された。

研究3では、4歳児と5歳児を対象に、明確な交代の意志がなければ交代できない魚釣り
ゲーム場面を設定して、二者関係における交代制ルールの産出と主導者の発達を検討した。
その結果、1匹釣ったら交代するという規準が明確な1匹交代は4歳児よりも5歳児で多い
ことが示された。また、規準がない交代の場合にいざこざが多く見られたことから、うま

く関係調整をするためには規準が明確な交代制ルールが重要であることが示唆された。また、特に5歳女児で規準が明確な1匹交代や実行者主導調整が多いという性差が示された。他者への配慮を行い、他者と共有しやすい明確な規準を用いて関係調整を行う能力は、女児の方が早く発達することが示唆された。

研究4では、4歳児と5歳児を対象に、三人組での魚釣りゲーム場面を設定して、三者関係における交代制ルールの産出と主導者の発達を検討した。その結果、規準が明確な1匹交代が5歳児で多くなることが示された。また、規準なしの交代でいざこざが多くなることが示され、三者関係においても、規準が明確な交代制ルールが関係調整に重要であることが示唆された。

また、三者関係では性差が大きく示された。規準が明確な1匹交代が男児よりも女児で多く、5歳女児では実行者主導も多い傾向にあった。さらに、順番確認や仲介といった全体のメンバーに配慮する行動が女児で多いことも示された。従って、三者関係においても、全体のメンバーに注意を向け他者を配慮した関係調整を行う能力は、女児の方が早く発達することが示唆された。それに対して5歳男児は交代制ルールが産出されないグループもあり、待ち時間が長くなる全部交代も多かった。更に、実行回数の偏りが女児に比べると多く見られる傾向にあり、不公平な交代になっているグループも見られた。男児は他者の取り込みが未熟で、力関係による関係調整の偏りが見られることが示唆された。

研究5では、4歳児と5歳児を対象に、魚釣りゲームの難易度を変化させて、ゲームの難易度が二者関係における交代制ルールの産出と主導者に及ぼす影響を検討した。その結果、4歳児も5歳児も、交代制ルールの産出はゲームの難易度に影響されることが示された。ゲームが簡単な方が交代制ルールの規準となる魚が釣れるという行動の完了が早く容易になるため、規準が明確な1匹交代のルールを産出し、他者を配慮した実行者主導調整も多くなり、いざこざが少なくなることが示された。

研究6では、4歳児と5歳児を対象に、交代のための規準が外的に不明確な遊具としてお絵かき遊び場面を設定して、遊具の質が交代制ルールの産出とその主導者に及ぼす影響を検討した。その結果、外的規準が不明確なお絵かき場面でも、幼児は交代制ルールを産出することが示された。また、実行者主導調整が多くみられ、自分の描画の終了という区切りをつけて交代する他者を配慮した関係調整ができることも示された。しかし年齢差も見られ、4歳児ではまだ他者配慮のない待機者主導調整もみられるが、5歳児になると、他者

の状況をよく見てモニターしながら関係調整するように発達する傾向にあることが示された。外的規準が不明確な場面では、より他者の行動を見るということが関係調整にとって重要であることが示唆された。

第2節 交代制ルールの産出と主導者の観点からみた関係調整の発達と性差

本研究で明らかになったルールの産出とその主導者の観点からの、遊び場面における仲間との関係調整の発達についてまとめる。まず、4歳児と5歳児の年齢の特徴をそれぞれ示す。

4歳児は、交代制ルールの産出が遊具の資源量やゲームの難易度や仲間の人数など状況要因に左右されて不安定だった。二人で使用できる遊具がある多資源条件では、同時制ルールを産出した。しかし、遊具が二人に1個しかない少資源条件やゲームが簡単な平易条件など状況次第では、交代制ルールを産出することができた。全体的には規準が明確な交代制ルールを産出することができたが、交代制ルールの規準も状況要因に左右されており、5歳児に比べると全部交代が多く、ゲームが難しい困難条件では規準なしの交代、三人組になると数匹交代という不明確な規準の交代制ルールを産出することが見られた。

ルールの主導者に関しては、待機者主導調整がほとんどで、自分の方から他者を配慮する実行者主導調整はあまり見られなかった。さらに、交代の規準を設定することが難しいお絵かき遊び場面では、実行者の様子をよく見ておらず、相手が絵を描き続けているにも関わらず交代を要求する他者配慮のない関係調整を行うことが示された。

5歳児は、交代制ルールの産出が状況要因に左右されずに安定していた。交代の規準も明確で、三者関係になってもゲームが困難な状況になっても交代制ルールの産出が安定していた。ルールの主導者に関しては、全体的には4歳児と同様に待機者主導調整が多かったが、5歳女兒のみ他者を配慮する実行者主導調整が多かった。交代の規準を設定することが難しいお絵かき遊び場面でも、他者の行動をよく見てモニターして関係調整を行っていることが明らかになった。また、5歳児では、性差が大きくなることが明らかになった。特に三者関係では、5歳女兒は、他者を配慮した実行者主導調整が多いだけでなく、全体のメンバーを配慮した順番確認や仲介という行動が多かった。一方、5歳男児は、交代制ルールが産出されないグループもあり、待ち時間が長くなる全部交代も多かった。更に、実行回数の偏りが見られ、不公平な交代になっているグループも見られた。

以上のことから、4歳児から5歳児にかけて、同時制ルールから交代制ルールへ変化し、交代制ルールの規準が不明確なものから明確なものへ変化し、また他者配慮的な関係調整ができるようになることが明らかになった。特に5歳女児では交代の規準が明確で他者配慮的に主導し、三者関係では順番確認や仲介など全体的に他者を配慮した関係調整ができることが示された。

このような同時制ルールから交代制ルールへの発達、母子関係の共同注意の研究で示された同型性から相補性への発達と類似している。母子関係においては、この発達の足場かけは母親が行っているが、仲間関係においては、交代制ルールの産出が1つの足場かけのような役割を果たしていることが本研究で示された。このことは、本研究では子ども達のいざこざやゲームの主導者に現れている。例えば、交代制ルールが産出されている場合には、遊具が共有されて、いざこざが少ないゲームが展開された。また、交代制ルールの規準が明確な場合に、いざこざが少ないことも示された。

同時制ルールではなく交代制ルールが足場かけになっていると考える点に関しては、次のことが考えられる。確かに同時制ルールでも、関係調整はできる。しかし、同時制ルールでは平行的な遊びの進行になり、自分が遊びを実行している間に他者の行動に注意を向けることができない。それに対して交代制ルールでは、次に誰が実行するかという他者の行動の予測をつけることができ、また他者の行動を見るチャンスが増える。Bandura(1977 原野訳 1979)の社会的認知理論の中で、まず社会的モデルを見るということにより、反応の象徴的表象を構成することができ、その表象に基づいて自分自身を動機づけたり調整したりする機能が働き始めると説明されている。このことから、交代制ルールの産出が、他者の行動をよく見る機会の増加につながり、さらにいっそうルールに他者を取り込む役割を果たして、他者との関係調整がうまく行われるようになると考えられる。

以上のことから、交代制ルールの産出が幼児の関係調整の足場かけとなり、他者を遊びの中に取り込んで、遊具を継続的・安定的に共有することができること、つまり、関係重視と関係維持の側面からの関係調整が可能になることが示された。しかし、幼児にとって交代制ルールの産出は、ゲームの難易度や遊具の量や質に影響を受けるため、幼児の関係調整を促進するためには環境設定の考慮が不可欠であるといえよう。

ところで本研究では、4歳児から5歳児にかけて、交代制ルールとその主導者について、年齢差と性差が見られた。これらの年齢差、特に関係調整の年齢差を説明する他の研究と

しては、心の理論の獲得や他者の感情理解の研究が挙げられる。従来の研究で、心の理論の獲得や他者の感情理解が子どもの社会的能力と関連があるという知見が得られているものもある (Slomkowski & Dunn, 1996; Dunn & Cutting, 1999)。しかし、溝川 (2011) では、心の理論の理解や複雑な他者の感情理解は一部の社会的能力と相関が見られたものの、仲間関係とは直接的な相関は見られなかった。また、心の理論の獲得や感情理解の能力には性差が見られないとする研究が多い。従って、このような認知的能力は確かに社会的能力の基盤ではあるが、関係調整のスキルに直接または全体的に関係しているとは限らないと考える。その理由をここでは、交代制ルールの産出の中には、心の理論や感情理解には含まれない自己統制の側面と他者とのコミュニケーションという側面があることに注目して考察をする。

まず、自己統制の側面について考える。交代制ルールの産出によって関係調整がうまくいくことを考えると、交代するためには順番を待つといった抑制能力が関わっていることが考えられる。交代の規準が不明確でいざこざが生じている事例のエピソード分析からも、なかなか魚が釣れない場合に順番を待ちきれずに相手に関わり、最終的には力づくで遊具を取り上げる場面が見られた。抑制能力の発達には性差も見られており (柏木, 1988), 女兒の抑制能力の高さが交代制ルールの産出に影響を及ぼしているとも考えられる。

しかし、関係調整の未熟さを抑制能力の未熟さだけで説明することはできない。なぜなら、4歳児や男児には、むしろ待ち時間が非常に長くなる全部交代が見られたからである。抑制能力が未熟で待てないのであれば、待ち時間が短くなる規準の交代制ルールの産出するはずであるが、そうではなかった。全部交代は、一人の幼児が一通り全部ゲームを終えてから次の幼児に交代するものである。従って、自己と遊具の関係が重視されており、自己と遊具の関係の中に他者を取り込んでいる程度が低いと考えられる。この点では、同時制ルールと類似の性質を持つといえるだろう。

つまり、関係調整がうまくいくためには、単に自己抑制の能力の側面というよりは、他者に注意を向けて自己と遊具の関係の中に他者を取り込んでいく関係重視の側面が最も重要であると考えられる。従来、自己統制能力は自己主張と自己抑制の側面から検討されてきたが、近年その中に注意の制御機能を含めて検討する考えが出てきている (Eisenberg & Spinrad, 2004; 大内・長尾・櫻井, 2008)。これは注意を焦点化したり移行したりする能力である。本研究に見られた交代制ルールも、心の理論や感情理解というよりは、注意を

焦点化したり移行したりする自己統制機能に関わる能力を基盤にして、遊具と他者との両方に注意を向けるという関係調整が発達すると考えられる。

次に、他者とのコミュニケーションが含まれている点について考える。関係調整の発達の性差については、従来、子どもの日常生活における会話のスタイルに性差が見られ、男児は支配的なコミュニケーション、女児は友好的なコミュニケーションを行うこと (Leaper, 1991; Leman, Ahmed, & Ozarow, 2005)、対人交渉方略は女児の方が発達が早いこと (山岸, 1998; 渡部, 1993, 1995) が示されている。これは、対人関係を重視した他者配慮的な行動を、女児の方に求める性役割を意識したしつけの影響によるものであると解釈されている。本研究で検討された関係調整の発達についても 5 歳児で性差が大きくなり、特に三者関係という他者への配慮が必要になるほど性差が大きくなることを考えると、このような性役割に基づく社会化の影響も無視できないと言えよう。

従来は、幼児の自由遊びは、いざこざの葛藤解決という一時的な仲間との関係調整にのみ焦点が当てられて研究されてきたが、本研究では、ルールの発達に注目し、仲間との良好な関係を重視し、遊びの中に他者を取り込み、遊具を継続して共有する関係重視や関係維持を含めた関係調整に焦点をあてた点に意義がある。幼児期の仲間との関係調整のためのルールは同時制ルールから交代制ルールへとまた、規準が不明確な交代制ルールから明確な交代制ルールへと発達し、特に規準が明確な交代制ルールの産出が、幼児の仲間との関係調整の重要な足場かけの役割を果たしていることが示された。

第 3 節 教育への示唆

幼児期の仲間との関係調整の能力が欠如すると、のちの青年期の社会的不適応のリスクとなることが示されている (Parker & Asher, 1987; Rubin et al., 1998; Asendorpf et al., 2008)。このリスクを軽減するために、保育現場で仲間との関係調整の能力を促進する取り組みが必要である。本研究では、幼児期の仲間との関係調整の発達の様相を検討し、4 歳児から 5 歳児にかけてルールを介した仲間との関係調整が発達する点、また、幼児は遊具の環境によって他者との関係調整が影響される点が示された。これらの結果から、4 歳児から 5 歳児の保育場面における仲間との関係調整の能力を促進するための環境設定に関して以下のようなことが示唆される。

(1) ゲーム遊び場面の設定の意義

本研究の結果から、交代制ルールが幼児の仲間との関係調整の足場かけの役割を果たしていることが示された。このことから、保育場面の中に交代制ルールを含むゲーム遊びを多く導入することが必要だと考えられる。

従来、幼児のソーシャルスキルの促進のために、ソーシャルスキルが未熟な子どもに仲間入りのスキルやいざこざなどの葛藤解決のスキルを獲得させる方法がとられてきた。確かにスキルが未熟な一人の子どもと1つのスキルに焦点をあてて直接的に指導していく方法も必要である。しかし、仲間関係の中で最も多くいざこざの原因となっている遊具の使用に関するルールを、実際のゲーム遊びの仲間関係の流れの中での経験させていくことも重要だと考えられる。

現在保育の中でゲーム遊びも行われているが、鬼ごっこやサッカー、トランプやかるたなどが多く、遊具を交代で使用して自己と遊具の中に他者を取り込むようなルールの産出が必要なゲームは比較的少ないと考えられる。自己と遊具の中に他者を取り込み、遊具を継続的に共有するためのルールの産出、特に他者を見る機会を提供する交代制ルールを産出するようなゲーム遊びを多く経験させることが必要だろう。遊具が継続的に安定して使用できるゲーム遊び場面で他者を見る機会を得ることで、社会的学習能力が促進され、他のスキルを得るための社会性の能力にもつながると考えられるからである。

(2) 物理的環境設定の条件

本研究の結果から、ゲーム場面の設定でもさまざまな遊具の条件によって、幼児の交代制ルールの産出が影響されることが示された。このことから、交代制ルールの産出が未熟な幼児では、ゲーム場面の設定の際に、自由度の高い遊具ではなくある程度限定した遊具を用いる、遊具の資源量を減らす、平易なゲームを設定するなどの環境設定への条件が必要であることが示唆される。条件が考慮された上でさまざまな遊具を経験すれば、社会性が未熟な4歳児でも、交代制ルールを産出し、規準の設定や他者への配慮など他者との関係調整の練習をすることが可能になると考えられる。

(3) 人的環境設定の条件

本研究の結果から、二人組や三人組の少人数の仲間との関係調整で交代制ルールの産出が行われやすいことが示された。特に、三人組では順番確認の発言や仲介などより他者を配慮した行動が観察された。このことから、少人数でのゲーム場面の設定は関係調整の発

達に必要だと考えられる。

また、全体的に交代制ルールの1匹交代という明確な規準や実行者主導交代は女兒の方が男児よりも多く、順番確認や仲介なども女兒の方が多いことが示された。実行者主導交代や仲介は、自分から遊具を渡す行動であり、他者への配慮が強いと考えられる。従って、女兒の方が他者を取り込んで他者との関係調整をする能力が発達していると考えられる。このことから、他者への配慮が弱い男児に対しては、男女の混合の組み合わせのグループ活動を行うことが重要であると考えられる。女兒の他者配慮的なルールの主導によって、男児もより他者を取り込むことを学び、いざこざの少ない交代制ルールを経験することで、自分から他者を配慮する関係調整を獲得することができるかもしれない。

近年保育現場では、名簿なども男女混合になっており、グループ活動は男女混合が多く行われている。しかし、自由遊びでは現在でも男女が別々の遊びを好み、男女で別の遊びの種類を行っていることが多く観察される。ゲーム遊びは、好みに比較的男女の違いが見られないものが多いので、ゲームという男女共通の遊びの中で男女混合チームを設定することが、他者配慮のある交代制ルールを促進するためには重要な方法であると考えられる。

第4節 今後の課題

今後は、幼児の仲間との関係調整の発達について、交代制ルールの産出を促進する要因についてさらに検討する必要があるだろう。物理的な状況要因によって幼児の行動は大きく影響されることが本研究でも示された。従って、どのような遊具の特質が交代制ルールの産出に影響を及ぼすのか、関係調整の発達を促進するのか、さまざまな特質をもつ遊具を用いて研究を積み重ねる必要があるだろう。同時に、前述した仲間との関係調整に関わる内的な認知能力や社会的能力との関連も同時に明らかにしていく必要がある。

また、本研究の結果から得られた保育環境設定に関する示唆は、今後保育現場に導入して、その効果を検証していく必要があるだろう。ゲーム遊び場面を設定することで、交代制ルールの産出が足場かけとなり、他者を取り込んで関係調整を行う能力の促進が期待される。ゲーム遊びの様子の観察から、全く交代しなかったり順番が回ってこなかったりなど関係調整がうまくいかない幼児をスクリーニングすることが可能となり、臨床発達心理学的な視点からも導入が検討されることが重要だと考えられる。

引用文献

- 浅賀万里江・三浦香苗 (2007). 集団保育場面における幼児のいざこざの意義に関する一考察——量的・質的分析の両面から—— 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 10, 55-64.
- Asendorpf, J. B., Denissen, J. J., & Aken, M. A. G. (2008). Inhibited and aggressive preschool children at 23 years of age: Personality and social transitions into adulthood. *Developmental Psychology*, 44, 997-1011.
- Bakeman, R., & Adamson, L. B. (1984). Coordinating attention to people and objects in mother-infant and peer-infant interaction. *Child Development*, 55, 1278-1289.
- Bandura, A. (1977). *Social Learning Theory*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- (バンデュラ A. 原野広太郎 (監訳) (1979). 社会的学習理論——人間理解と教育の基礎—— 金子書房)
- Dunn, J., & Cutting, A. (1999). Understanding others, and individual differences in friendship interactions in young children. *Social Development*, 2, 201-219.
- Eisenberg, E., & Spinrad, T. L. (2004). Emotion-related regulation: Sharpening the definition. *Child Development*, 75, 334-339.
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティー研究, 15, 347-361.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- Leeper, C. (1991). Influence and involvement in children's discourse: Age, gender, and partner effects. *Child Development*, 62, 797-811.
- Leman, P. J., Ahmed, S., & Ozarow, L. (2005). Gender, gender relations, and the social dynamics of children's conversation. *Developmental Psychology*, 41, 64-74.
- 前田健一 (2001). 子どもの仲間関係における社会的地位の持続性 北大路書房
- McLoyd, V. C., Thomas, E. A. C., & Warren, D. (1984). The short-term dynamics of social organization in preschool triads. *Child Development*, 55, 1051-1070.
- 溝川藍 (2011). 5, 6 歳児における誤信念及び隠された感情の理解と園での社会的相互作用の関連 発達心理学研究, 22, 168-178.

- 大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男 (2008). 幼児の自己制御機能尺度の検討 教育心理学研究, 56, 414-425.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. (1987). Peer relations and later personal adjustment are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.
- Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. (1998). Peer interactions, relationships, and groups. Damon, W. & Eisenberg, N.(Eds.) *Handbook of Child Psychology*, 3, 619-700.
- Slomkowski, C., & Dunn, J. (1996). Young children's understanding of other people's beliefs and feelings and their connected communication with friends. *Developmental Psychology*, 32, 442-447.
- 渡部玲二郎 (1993). 児童における対人交渉方略の発達——社会的情報処理と対人交渉方略の関連性—— 教育心理学研究, 41, 452-461.
- 渡部玲二郎 (1995). 仮想的対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究——年齢, 性, 他者との相互作用, 及び人気の効果—— 教育心理学研究, 43, 248-255.
- 山岸明子 (1998). 小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連——性差を中心に—— 教育心理学研究, 46, 163-172.
- 吉田直子 (2010). “共同注意”の発達的变化 その2——「自他関係」の組織化に関する考察—— 中部大学現代教育学部紀要, 2, 67-76.